

たのきゅう物語

〔解説〕平成十八年（二〇〇六）徳島・小松島に伝わる民話を題材に、後藤田みどり・豊澤島栄によって作られた新作浄瑠璃です。浄瑠璃としての「たのきゅう物語」は、物語の中での「うわばみ（化け物）」と「たのきゅう」のやりとりに、有名な浄瑠璃の登場人物が出てきたり、当世の話題も取り入れるなど、楽しませる工夫が凝らされています。

〔あらすじ〕昔々、阿波の国小松島の田野村に、久兵衛（通称たのきゅう）という旅回りの役者がおりました。ある夏の夜、旅先からの帰り道、山中で一休みしていると、うわばみの化け物が現れました。うわばみに「おまえは何者か」と問われたので「たのきゅう」と答えると、うわばみは「たぬき」と聞き間違え、たぬきならば化けて面白い芸を見せよと言います。久兵衛は役者ですから、芝居の衣装を着て「化けて」見せます。酒も入って上機嫌のうわばみは、礼だと言って小判をくれます。これに味をしめて、うわばみ退治を目論んだ久兵衛でしたが、突然石につまづき、谷底へ転げ落ちます。そこへ観音様が現れ、強欲な久兵衛を諭します。改心した久兵衛は、うわばみをも救ってやって欲しいと、観音様に申し出て、その心がけにより救われるのでした。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

昔むかしその昔、ずっと昔のまだ昔

婆「阿波の国、小松島の田野村に久兵衛さんという
旅廻りの役者がおつてなあ、もう盆も近いとい
うので、佐那河内で芝居を打ち上げ、山越えを
して田野村へ帰る事になったそうな」

夜道は怖い恐ろしい、提灯ぶらりぶらさげて

久兵衛「チエツ、重いなあ、重い荷物は肩に食い込
むわい、あーえらいこつちや、どっこいしょ」

荷物を下せばへなくくくくくくく

久「ヤレく、こころで一服じゃ」

たばこ吸うとて腰下ろす

久「プー、くろうてさっぱりわからんが、もう中津
峯はこえたじやろうか阿津利峠を越えて勝浦川
の浅瀬を渡ればすぐに田野村じゃ、ヤレく」

その時藪の中よりも咳込む声のけたたましく

化け物「ゴホンくくく、誰じゃたばこを吸う奴は。

わしはたばこの煙が大きいじゃ。早うたばこ
を消さんかい、消さぬとおまえの首をへし折る
ぞ」

現れ出でたる大化け物

久「ウワツ大変じゃ、これが中津峯に住む化け物か、
ア、イエイエうわばみ様か、命ばかりはオタノ
お助けなされて下さりませ」

あわてふためきたばこ消す

化「お前はだれじゃ、命は助けてやるほどに名をな
のれ」

久「ハイく私めは田野村の久兵衛、人呼んでたの
久と申しまする」

化「なんじやたのき、お、お前は狸か。狸なれば化
けられるであらう。サア早う化けてなんぞ面白

い芸を見せてくれ」

久「それはたやすいことでござりまするが、私めは化けるのが下手でござりまする故、手間がかかります。少々お時間をくださりませ」

化「ヨイ／＼わしは氣が長い、ゆつくりと化けてみよ」

久「さようならばこの大きな岩、この裏で化けます。どうか恥ずかしいのでおのぞきにならぬようお願い致します」

化「ヨシ、何に化けておるのじゃ、ちよつぴり教えてくれ」

久「下題は本朝廿四孝奥庭狐火の段、今からあなた様の大好きなそれはそれは美しい八重垣姫に化けるつもりでございます。まずはご覧くださりませ」

思いにや焦がれて燃ゆる野辺の狐火小夜更けて

八重垣姫「あれあの奥の間で檢校が唱う唱歌も…」

久「どうでございましたか。お楽しみ頂けましたか」

化「これは見事であつたぞ。只姫君は氣位が高くて近寄りにくい。町娘に化けられぬか」

久「それはいと安きことにござりまする。では、おきやんな江戸の娘に化けてみましょう。まずは櫓のお七から、続きましてこれ又粹な深川芸者に早変わりでおみせしましょう」

ヤアあの鐘は、はや九つ、たとえ刀は手に入つても、今夜中に届けねば吉三さんはやっぱり御切腹、エ、羽がほしい、つばさが欲しい、とんで行きたい知らせたい、エ、姉さんほんかエアコリヤ／＼きぬ衣の言葉も交わせずあすの夜の裏の窓にはわしひとり、ソレ合図はよいかエ

久「マアおひとつどうぞ」

化「これはたまらぬ色つばい。おい、わしの嫁になる気はないか」

久「いやでござりますよ、私は男が女に化けているだけですから…」

化「イヤ、それをつい忘れておった。次はなんじゃ、

こんどは男に化けてみよ」

久「それではイケメンの若衆になりましょう。尾上

松也か中村隼人、松坂桃李か羽生結弦、水もし

たたる二枚目に化けてみましょう」

思いぞ出づる壇ノ浦の海に兵船、平家の赤旗、陸

に白旗、源氏の強者、あらものものしや夕日影に長

刀を引きそばめ、それがしは平家の侍、悪七兵衛景

清と名乗りかけ／＼なぎ立て／＼なぎたつれば

化「ヤンヤ／＼これはかっこいい！ 見事な若衆で

あった。そろ／＼酔いが廻ってきたぞ。まだ他にも化けられるか。早う化けてみよ」

久「ハイ／＼では、最後にあなた様のお幸せを祈り、神々をここへお招きして踊ると致しましょう。

寿式三番叟でござりまする」

三番叟「そなたこそ」

化「ヤンヤ／＼これはお見事／＼、だがその鈴をふられると頭がぼーつとして体がしびれてくる。

これは何としたことであろう」

久「アッしまった。これは魔除けの鈴を振ってしも

うた。化け物にとつては一番苦手なものであつ

た。イエ／＼この鈴でござりまするか。これは

あなた様のお幸せを祈り神々に長寿祈願をする

ためのものでござりまする。只今すぐにお体が

爽やかになりますので、今少しお待ちなされて

くださりませ」

化「おゝ苦勞であつた。だが面白かつたぞ。わたしはもう酔うたぞ。眠たい。お前はもう帰れ。

そのかわりチョコ／＼／＼／＼ここへ来て化けてくれよ。これは今日の礼じゃ、持ち帰れ」

どさつと投げ出す布袋。アレーツとばかりに久兵

衛は尻もちついて呆れ顔。

久「これは何でござりまするか」

化「まあ中をあけてみよ」

驚き慌て久兵衛は布袋の口をあけてみる

久「や、これは小判ではありませぬか」

化「おゝそうじゃ、お前、小判はきらいか。わたしは

たばこのヤニが大嫌いじゃ」

あとはムニヤ／＼寝入りこむ。抜き足さし足たの

久は、今の内にと布袋をひつつかみ荷物かついで逃

げいだす。提灯のあかりをたよりの山道は心細うてたよりない。

久「あゝ、あのうわばみのおかげで思わぬ時を過ご

してしもうた。夜が明けるまでに帰りつかぬやも知れぬ。サア／＼早う急がねば。ヨッコラコ

ラシヨドツコイシヨ」

わしが嫁さは今頃は大口あけて高いびき。

久「さつきうわばみに酒をどさり飲ませ聞いてみ

たところ、たばこのヤニが大嫌いじゃと言うと

つた。今度来る時は三番叟の鈴を振り、酒をた

んと飲ませたばこのヤニをたくさんふりかけて、

おろち退治に來ると致そう。お礼にくれた小判

の重さ。まだ／＼小判をウントコサ持っている

であろうナア」

よからぬことを考えながら久兵衛はニンマリ／＼

ほくそ笑む。その時突然目の前の石につまづきばったりと倒れたところが坂の上、コロ／＼と転がって深い谷間へまっさかさま。アレーツと悲鳴を残して消えにけり。

やがてのうちにまんまるの、月は西へと傾いて、谷底深く横たわる久兵衛の姿照らし出す。いとも気高きお姿の観世音菩薩出で給い

観音様「汝よからぬ事をたくらみ、いかに相手が化け物と言えど、その命まで奪わんと考えたるは許し難し。後悔すれば命は取らぬ、サ、返答いかに」

氣を失いし久兵衛は尊き御声に目を覚ます。

久「アリアア観音様のお姿じゃ、ここがあゝの世とやら申す所か。せつかく大金が手に入つたばかりじゃのに、使わぬうちにこんな所へ来てしもう

たウワン」

観「コリヤ久兵衛、今より心安らかに善人に立ち帰り、己が犯した罪を懺悔せよ。観世音の慈悲は深いぞ」

久「ハハア私が悪うございました。つい／＼金に目がくらみ、化け物の命を取るところでございました。今日からは生まれ変わり、世の為人の為、生きてまいります。今迄私が犯したすべての罪をお許しなされて下さりませ。あの、うわばみの化け物の事でござりますが、人の姿に化けては旅の者をおどし、金や命を奪っておりまます。末は地獄でのたうつは必定。観音様のお力にすぎり、畜生の心から姿形を取り戻して下されますよう、お慈悲をお願い申します」

観「あっぱれ久兵衛、よくぞ申した。これからはそ

なたは御仏に仕え多くの者を助けるのじゃぞ、
よいな」

久「ハハアありがたき幸せに存じます。私も仰せ
の通り中津峯の御寺にて出家をし、御仏にお仕
えしとう存じまする」

涙ながらに顔あげる、暁早き東雲の空より昇る太
陽に

久「中津峯のお観音様、ありがとう存じまする」

尊き御法の中津峯、今に伝わる観音のありがたか
りける次第なり。